

Works Review の刊行にあたって



矢野眞和

Works Review 編集委員長
東京大学大学院 教育学研究科教授

大学が知識の生産を独占する時代は終わろうとしている。学術の中心とされた大学は、個別学問領域の論理に固執するあまり、社会の問題との関係性を希薄にさせた。このような紋切り型の大学批判をしたいわけではない。大学の研究の最前線は、伝統的な個別学問領域を横断し、融合しながら、社会の変化とともに進化を遂げている。そう考えるのが公平な見方だろう。

しかしながら、現代社会の特質は、大学の変化よりも社会の変化のスピードが早いところにある。科学技術文明の進展とともに、社会の問題群はますます複雑さを増幅させ、大学以外の機関も新しい問題の解決に向けた知識の生産に取り組みざるをえなくなっている。実際に、政府機関、産業界の研究所、シンクタンク、コンサルタントなどが、知識生産の新しい拠点として著しい成長を遂げてきている。知識の生産と消費が社会経済の中心となる「知識社会」の到来を肌で感じる時代になっている。

ところが、問題解決を企てた知識が新しい問題を発生させる原因にもなっている。U.ベックは、「科学および知識の正当性は怪しくなり、科学を支えた専門知識の文化は危機に陥っている」と喝破した。「知識社会」は危険な社会だが、知識を懐疑しつつ、それでもなお信頼可

能性のある知識を求めて、問題解決を企てるしかない。それが知識社会の宿命である。この企てを担う一つの拠点である大学は、批判しつつも考える「相互批判空間」の中心にならなくてはならないと私は考えている。そして、それを実りあるものにするためには、大学の外との知的交流を深め、持続させなければならない。

ところが残念ながら、大学と実業界は、知的に交流する以前に、相互蔑視の関係にあるように思われる。とりわけこの傾向は、社会科学の領域において強い。相互蔑視は、お互いの無知とお互いの不勉強による結果である。お互いがお互いを真摯に学ぶ態度が肝要だと思う。

私事ながら、大学を卒業と同時に民間会社に就職し、その後大学にもどった私は、いくつかの偶然が重なって、伝統的な学問領域の作法からみてかなり離れた道を歩くことになった。その過程で、特定の個別学問に拘泥せず、そして、実務の世界に学ぶ姿勢を保ちながら、社会問題を解決する道筋を描くささやかな努力をしてきたつもりである。もちろん、その成果には忸怩たるものがあるが、大学と実務の世界との知的交流が活発にならないものかと痛感してきたし、願ってもきた。そのような思いはかなり昔からのことだった。

そうした個人的体験があったから、企業現場のマネジメント、雇用、人材育成、キャリア形成などの領域において、積極的に知識の生産を蓄積してきたリクルートワークス研究所が、自分たちの成果を広く世間に発信しようとする企画を知らされたときに、非常に嬉しく思った。その発信が、社会の知的財産を豊かにするだけでなく、大学に新鮮な刺激を与えるに違いないと期待したからである。

このワークスレビューの刊行にあたって、四人の大学人による論文の審査制度が導入されることになった。全員が、大きな期待を込めて、喜んで審査員を引き受けた。審査にあたって私たちは、次の三点に心掛けた。第一は、論文発表会を開催し、執筆者と審査員との間に会話の機会を設けること。第二は、実務に直結する独特の提案を重視することである。大学人では知りえない情報の蓄積とそこから抽出される実務に役立つインプリケーションを大いに期待した。そして、第三は、研究論文としての作法と論理展開を崩さないようにすることである。

しかしながら、その試みは、決して易しいものではなかった。大学人からみた評価と実務家からの評価との間には、少なからずの溝があるのは否めない事実である。一つないし複数の視点（専門）から出来事（問題）を説明することに慣れ親しんでいる大学人と一つの出来事を一挙に丸ごと解決することに逸る実務家との間には、出来事の理解に少なからずのズレが生じるようである。加えて、四人の審査員の専門の違いもある。専門を横断しつつ、大学と実務の世界が交流するのは決して生易しいことではないが、執筆者と審査員の間で交わされた会話の内容は、非常に知的刺激に富んだものだった。私自身もそこから多くを学ぶことができ、嬉しく思っている。

今回の経験を踏まえて、さらなる会話を重ねれば、ユニークで魅力的な研究論文集になるものと確信している。何よりも大事なものは、相互

蔑視の関係を解放させることである。低次元の事柄のように思われるかもしれないが、相互蔑視を相互批判の関係に変えることが、大きな成果をもたらす第一歩だと思う。